

突然訪れた父との別れ

父が亡くなり10年。最後は相変わらず酒も飲めないのに、ぼん友とススキノの行きつけのスナックでカラオケをして悠々の午前様。午後3時ころに起きて、腹が減ったと母が前日に作った煮物のニンジンなどをどに詰まらせて窒息。母は慌てて事務所にいた私のところに来て「とーさんが大変だ！」となり、慌てて親の家の食堂に向かった。

のどにあるだろうニンジンを指で探ってみたが見当たらず、救急車が来るまで「おやじ頑張れよ！」と両手を強く胸に何度と押し当てた。救急車が来て「ミヤイさん代わります」となり、町立病院に運ばれる。運を天に任すとはこのことなのか。心の中で1時間以内に病院から連絡があれば、助からないだろうと覚悟は決めて、事務所の壁にかかったジョンディアの時計を見続けた。

そして、その時は来た。45分くらいで病院にいる母から電話が入った。事務所で待っている間に小学生だった息子が帰って来たので、一緒に病院に向かった。しっかりと人の死を理解させるためだ。町立病院の3階の待合所の向かいの病室のドアを開けた。父がベッドに横たわり、母と30歳くらいの女医さんと看護師

さんが2名いた。病室に入り10秒も

ないうちに女医さんから「脳に10分以上血流がない状態です。どうされますか？」とダイレクトな答えが返ってきた。母と話させてくださいと言ひ、息子、母と私は病室を出た。

当然、母は何とか生きてもらいたいと廊下で下を見ながら話す。

脳に10分以上血流がない、それは病院に着いてからの時間で、実質45分間、脳に血流が送られていないのだ。ということは、医学の知識がなくても、医療ドラマのうる覚えの知識上、植物状態も難しいことになる。

母は東京にいる二男と長女が帰って来るまでは温かい体でいて欲しいと言う。私は「薬にさせたほうが良いのではないか」と落ち着いて話した。

私は一度病室に戻り、「ほかに延命の処置のやり方がありますか？」と聞いた。女医さんは「〇〇〇〇剤を打てば15分心臓は動きます。その15分後に2度目を打つと10分、その10分後に3度目を打つと5分間心臓は動きます」と淡々と答えた。私の

最後の親孝行

Vol.159



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物にする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

判断で「先生これ以上の治療は望みません」と伝えた。

女医さんは聴診器を使い、たぶん脈を確認、ライトで瞳孔を確認、この二つで1分程度の時間だった。女医さんは静かに「ご臨終です」と言うので部屋を出ていった。

すべてが何か儀式のようであり、テレビドラマさながらのように時が流れた。父の体はどうするのか看護

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

師さんに聞いた。「今日中にご自宅に運んでください」。すぐ契約している葬儀屋に連絡を取り、1時間くらいで病院から自宅に向かった。

私の兄妹たちにはまだラインが普及する前だったので、携帯のショートメールで「父逝く」とだけ送った。10歳だった息子は「と無言のままだった」。

次は葬式の準備だ。なんせ40年以上身近で葬儀を行なったことがなかった。母に聞いてもわからないと言おう。お寺も葬儀の10年ほど前からの付き合いで長沼から50km離れたところにあった。とりあえず連絡をすると、住職はいなかったので伝言を頼んだ。

なんと葬儀には3つの寺から3人の住職が来た。葬儀は会ったこともない住職が務めることになり、その両サイドには先ほどの住職が陣取っている。仕方がないので葬儀終了後、私が「これからどうなたいかお願いすることになるのでしょうか?」と聞くと、スーと一人が手を挙げた。

祖父は4回結婚した(4回目はじゅうこん)1人目、2人目のおばーちゃんとは死に別れで、私が知っているおばーちゃんは3番目になる。後で知ったが、父は2番目のおばーちゃんの子供で、私が知っている50

km離れたお寺ではない、隣町のお寺に生前訪れて、その寺の住職に私が死んだらここで葬儀をお願いしたいと伝えたい。そんな話は母も私も聞いていなかった。

たまたま札幌で私が電話したお寺関係者(浄土真宗)の会議があり、父がお願いした住職がたまたまその話を聞いて、カクカクシカジカだからと父の葬儀を仕切ることになったそう。もしその会議がなかったら、たぶん別の住職が我が家の担当になったのだろう。もしかして、父の母がその会議とその時を作ったのであろうか。

頼みの綱はキイトルーダ!

母は2019年8月2日に他界した。他界する年の春に調子が悪くなり、生まれ故郷を訪れていた香川の病院に診てもらったが、すぐに北海道に帰ったほうが良いと言われた。4月に国立がんセンターで詳しい臓が見つかり、余命1年を私と妻、母の前で宣言された。その1年も私の聞き違いのようで、長くて、だっ

たらしい。その場でがん免疫治療薬の「あのノーベル賞をもらったオプジーボは使えますか?」と宣告した医師に聞いた。医師は「当院では同じような薬でキイトルーダを使っています」と

答えた。キイトルーダ? こいつふざけてるんか?と思ったが、後から調べてみると、確かに存在する薬だった。

医師は「どちらにしてもこの薬が合う人は今までに15人中1人でした」と淡々と言った。もちろんお願いして可能性に挑戦することになった。医師からは「もし治療が始まったら数千万円の治療費がかかりますよ」と言われたが、私は「田畑売ってもお金は調達します」と伝えた。医師は無駄なことは止めたほうが良い、治療困難な病だから、とは言わなかったが、そんな言い回しだった。兄妹が来てくれて「母には徹底的な治療をする。金も数千万円かかるかもしれない」ことを伝えた。二人は「任せる」とだけ言った。

まず薬が合うかどうかを検査することになった。やはりキイトルーダには合わないことが分かった。後はただ時が運命を決めるだけの日々を迎えることになった。

後から医師に聞くと、すい臓がんで一番長い人は15年で今でも治療中の人もいるが、みなさんご存知の通り決定的な治療薬がないのも事実だ。ノーベル賞を取っても治らないんだしたらノーベル賞の意味はあるのか、と自分に問いかけました。きっと将来は臓器作製ができる時代にな

るのだろう。

葬儀は麦の収穫は終わったが、まだまだ忙しい時だった。それは私だけでなく周りの農家も同じで、地域の方たちに参列していただくのも大変だったので親族だけで行なうことになった。葬儀は地元のお寺をレンタルすることになった。

父の葬儀の時も驚いたが、母の葬儀の時も驚かされた。一応、葬儀社の司会があり、普通は故人の略歴を報告するが、家族葬なので省略するものと思っていたし、その打ち合わせもなかった。

司会には「記」で始まり、昭和11年の生まれから、高校を出て20歳で父と結婚して、私、弟、長女を生み、育て、地域とどのように関わったかを直筆で書いたものを読んでもらった。生前、母に「なぜ父と結婚したのか」と聞いたら、母は「口数が少なく、正座から起き上がる時に、痛い!と我慢する姿を見たから」と言っていた。私の長女が驚いたのは、母が今の自分と同じ年で結婚して見知らぬ北海道に来たことだった。

永眠する前日に母の手を取り、「母さん、俺たち兄弟を生んでくれて、そして育ててくれてありがとう」と伝えた。意識が遠ざかる母の目からはうつつすらと涙が流れた。